

Ⅳ 高等部の実践

卒業後の生活にいきづくことをめざした学習活動

——MT (Multi purpose Time) を通して——

1. 研究の概要

(1) MTのあゆみ

本校では生徒の障害の重度化・多様化 また養護学校の義務制施行という時代の大きな流れの中で昭和50年代の初めから教育の内容・方法等の改善について話し合われてきた。それはまたそれまでのカリキュラムでは全ての生徒に対する指導が十分にはできなくなってきたということに対する解決策を模索する話し合いともなっていた。その中で既に実践されていた小学部の「朝の会」をヒントに「集団学習が効果的ではないか」という意見が出された。そして「部朝の会」「全校集会」といった集団学習が本校の指導の大きな柱として取り入れられるようになり その対極にある個への指導とともに実践・研究がなされてきた。高等部のMTもそれらの話し合いの中から生まれてきたものである。

MTとはMulti purpose Timeの略であり 文字どおり多目的に使える時間として昭和55年度から高等部の時間割に取り入れられた。それはいわゆる「ゆとり」の時間としての位置付けであり それまでにもなされていた校内の大清掃や学校行事のための作業をする従来の「一般作業」に加えて「季節的行事」あるいは「各種テスト」 また年一回の活動である「運動能力テスト」その他の内容が盛り込まれていた。

ところで生徒の実態の変化に伴い家庭での過ごし方 とりわけ家庭学習の在り方・内容の見直しが迫られてきた。家庭からは「家でぶらぶらして困る。もっと宿題を出してほしい」との意見があり 教師からも「もっと生徒の実態にあった宿題をだしたい」との意見が出された。そこで部会や部研究会での話し合いの結果「挑戦学習」という学習形態が考え出され MTの内容として取り入れられた。この挑戦学習には生徒達が教師の予想をはるかに上回る反応を見せてくれ MTの中心的内容として定着してきた。そしていつしかMT＝挑戦学習を意味するようになったのである。

① 挑戦学習

挑戦学習とは読んで字のごとく 何かの課題に挑戦する学習である。本校高等部では昭和55年度からその取り組みが始まっている。その発端は先に述べたようにもっと宿題を出してほしいという親の要望であったが 実際に話し合いを進めていくうちにその宿題(課題)を「単に机上の学習に限らなくてもよいのではないか」「もっと課題とすべきことがたくさんあるのではないか」という意見が多く出されてきた。そして高等部の教師がそれぞれ課題を考え、生徒に提示し、選ばせるという形をとったのである。

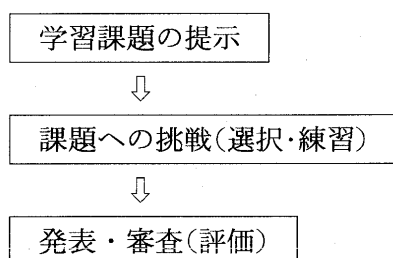
親の要望に応えるつもりであったが 結果的にこれは高等部創設以来話し合われてきた個々の能力を高めるための「検定制度」(生徒の能力に合わせて個々に目当てを持たせ 漢字の読み書きや計算力等の検定をするといったもの)の具体化という意味合いも

持っていた。

この学習を促した背景の一つとして集団学習があげられよう。本校では昭和53年度から集団学習が研究の内容として取り組まれてきた。その集団学習ではすべての教師 すべての子どもが総ぐるみで活動に参加するという集団指導の形態をとる中で 個に合わせた指導を行ってきた。挑戦学習でもこの総ぐるみの指導体制の特長をいかしながら 個に合わせた指導ができるという点で取り組みやすかったと言える。

ところでこの挑戦学習という名前から何か難しいこと 苦手なことなどに敢えてチャレンジするといった受けとめ方をされがちである。我々自身 当初はそのような感覚で課題を考えていたが 現在ではそのような意味合いの部分も大切にしながら自分の得意なことを今以上のレベルでチャレンジすることも重要視している。

挑戦学習の手順及び今までに出されてきた主な課題は図Ⅳ－1 表Ⅳ－1の通りである。なお課題は「知識に関するもの」「手先(手指)に関するもの」「運動に関するもの」の3つのジャンルに分け そのつど偏らないように調整している。



図Ⅳ－1

提示と発表・審査が全体で行われることがこの挑戦学習の大きな特徴になっている。特に自分で選んだ課題を一定期間練習した後発表する時 生徒達は大きなプレッシャーを感じ緊張を味わう。そしてその緊張が大きいほど合格の時の満足感と喜びは大きいのである。また発表の場で見ている友達から「頑張れ」などの言葉がかかり 審査結果に対して本人と同じくらいの喜びや落胆の表情が見られることがある。これは互いにかかわりあい認めあっていることが確認できる場面であり うれしいことである。

なお挑戦学習については昭和56・57年度及び平成6年度の研究紀要にまとめてあるので参照されたい。

表Ⅳ－1

知 識	手先(手指)	運 動
詩の暗誦	皮むき	縄跳び
漢字の読み方	箸の使い方	ラジオ体操
世界の国々	洗濯	シュート
俳句	楽器演奏	卓球
各地の特産物	缶切り	フラフープ
県庁所在地	風呂敷結び	ジルバ
野球博士	栓抜き	キャッチボール
J R博士	紐結び	盆踊り
百人一首	水移し	跳び箱
計算	バランス棒立て	倒立
世界の国旗	けん玉	腕立て伏せ
干支	くぎ打ち	バドミントン
英単語	ネジ締め	サッカー
世界の民謡	卵焼き	付養体操
カラオケ	独楽	ゴルフ
ジグソーパズル	缶積み	ストレッチ
道路標識	鋸の使い方	懸垂・ぶら下り
ローマ字	折り紙	片足立ち
漢字の書き順	洋服たたみ	脚力
辞典の引き方	お手玉	…など
各国の首都	糸通し	
…など	…など	

② ほんもの学習

MT＝挑戦学習という内容で10数年実践が行われてきたが 今日的な課題（学校週5日制 余暇時間の使い方等）を考える時に本当にMT＝挑戦学習でいいのか という疑問が出てきた。つまり自分の楽しみ・生きがいを見つけるために挑戦学習だけでまかなえるのか 練習・発表という形をとれなくても大切なこともあるのではないかなどの意見が出されてきたのである。また学校だけではなく実際の場所に行って活動することが大切ではないか という意見も出された。そこで今年度の研究の主な内容として 喫茶店の利用やボウリング・カラオケ等 今まで学校生活であまり経験させることのできなかった活動も将来の生活を考えると必要ではないか ということから積極的に取り入れてみようということになった。そして校内で設定した模擬的な活動や環境だけではなく 実際の場所や施設に行って活動することも大切であるとの共通認識の上にたって行うことにした。活動の単位は学級単位とし 具体的な活動をするにあたっては教師の援助をなるべく少なくしてできるだけ生徒自身が自分の判断・自分なりの方法でできるように配慮した。

ところでそのような内容・方法で行う学習なので当初この学習を「冒険学習」と呼んでいた。それは生徒達が活動する際 初めてのことに対処する あるいは分からないことに挑む場面が多く 言わば冒険するような感覚や姿勢が予想されたからである。しかし話し合いを進めていくにしたがい この学習では生徒達をとことんまで追い詰めることはしないで成功経験 成就感を味わわせることが大事だという共通認識をもつことができた。そこで“成功の見込みのないこと、危険なことをあえてすること”という意味のある冒険という言葉はその名前として今一つそぐわないのではないかな という意見もあって最終的に「ほんもの学習」と名付けることにした。

この「ほんもの学習」については次の項で詳しく述べることにする。

③ レクリエーション学習

生徒個々の挑戦を基本にする「挑戦学習」 学級単位で行う「ほんもの学習」に対し もっと多人数 つまり学部単位で行う活動もまた大切なものである。本校では「朝の会」や「生活」の時間に学部全体での活動も行っており これを「レクリエーション学習」と位置づけている。そのねらいは ①高等部の生徒全員が共に楽しむ ②個々の生徒がその能力に応じてかかわりあうことができる ことである。

内容としては「フォークダンス」「ウォークベースボール」「エアロビクス体操」「カルタ取り（百人一首）」などがあげられる。エアロビクス体操、フォークダンスなどはMTの内容というよりは「朝の会」の内容として考えられていた学習内容であるが これも余暇利用あるいは地域とのふれあいという観点から見れば大切な学習であると言える。

これらの中でウォークベースボールは冬期間の遊びとして またカルタ取りは冬の行事として本校でながく行われてきたものである。特にカルタ取りは生徒会主催の大会としても行われており 見る者が驚くような迫力で真剣に札を取り合っている。「百人一首」そのものはまた挑戦学習の共通課題にもなっており 本校高等部の一つの特徴をなすものである。

（石 井 雄 史）

（２）余暇生活の実態

本研究を進めるにあたって 余暇生活の実態を知る必要があると考え 次のような調査を行った。

- ① 卒業生に対する「余暇時間の過ごし方についてのアンケート」
- ② 在校生に対する「挑戦学習・余暇に関するアンケート」

ここでこれらの結果について検討を加えてみたい。なお設問及び結果については本章末に資料として添付してある。

① 「余暇時間の過ごし方についてのアンケート」の結果及び考察

この調査は今年度の同窓会場で参加者全員に対して自由回答または聴き取り調査によって行った。（有効回答数64）

その結果 職場等からの帰宅後及び休日の余暇利用で最も多かったのは「テレビを見る」であった。その他を見ると日々の生活に関わる「風呂にはいる」「料理をする」「買い物をする」「手伝いをする」などが続いた。いわゆる余暇利用といえるものでは「ゲームをする」「散歩をする」「お酒を飲む」などがあつた。このほかに音楽・読書・マラソン・カラオケ・版画・ビデオなどの回答があつた。また休日の余暇利用の中に「兼友親子の集い（同窓生の集まり）」「あすなろ青年学級（障害者向けの文化教室）」などの集会への参加が目立ち このように仲間同士で集まることのできる場の有用性を感じた。

長期休暇中の過ごし方としては買い物・遊びに行くが多く 意外なことに「旅行をする」がもっとも多くを回答をあつめた。ただ同行者は家族の場合がほとんどで「友人と」と答えたのは1人のみであった。またここでも在宅組が多く テレビを見る・音楽鑑賞・家の手伝い・ゲーム・読書・料理を作るという回答がほとんどをしめている。ただそのなかでもカラオケ人気は高いことがうかがえる。

趣味についてはかなり多岐にわたっており カラオケ・音楽・読書やプロ野球観戦・水泳からサイクリング・ソフトボール・すもうなどスポーツ関係、ワープロ・カメラなど実技関係 将棋・お茶・詩吟などの日本的趣味、汽車・時刻表等旅行関係が主なものである。また単に好きだというだけでなく絵画・カラオケ・琴・ピアノ・お茶など教室に通うなどして習い事をしているものもわずかながら見られた。

さて 卒業生達に自由になるお金はどのくらいであろうか。毎月の小遣いについて調査したところ 詳細は別表通りであるがもっとも多いのは1000円と5000円の7回答であつたが、多くは1000円から10000円の間であり（15000円や30000円という回答もまれにあつた）必要なときにだけもらうという回答も3割近くあつた。その使い道については飲食に使う・本やCDに使う・欲しいものを買うために貯金しているが大半をしめているがカラオケ・映画・ゲーム・パチンコ・散髪・美容院・募金といった声もあつた。

ところで本研究の実践部分の中心になるMTは既に10年以上続けられているが MTでの課題を含めて 学校で学んだこと経験したことはどの程度定着し 続けられているのであろうか。これが設問6の主旨であつた。実生活に有用な洗濯・アイロンがけ・調理や一人でもできるジグソーパズル・なわとび・折り紙が多くの支持を得るのは予想されたが

それ以上に普段の生活とは無関係といえる百人一首に2割以上の回答がよせられたのは驚きであり MTの時間が少なからず意義のあったものである証左といえる。

同様に学校から行ったことにより その楽しさを知り卒業後に行ったところはないだろうかということで設問7を設定した。その結果ボウリング場・映画館・健民プールが上位を占めた。しかもこれらの3カ所は家族より友人と行く機会が多いという結果が出た。

今回の調査の中でもっとも重要な設問に「これからしてみたいこと」があったが回答を見ると ごろね・読書・風呂・テレビ・ビデオ・CD・電話などこの限りでは「これからしてみたい」というより「今している好きなこと」という印象が強い。その意味でも学校生活の間に個々の生活世界を広げることの大切さが感じられる。

② 「挑戦学習・余暇についてのアンケート」の結果及び考察

今年度の第一回挑戦学習終了後 高等部生徒の保護者を対象にアンケート調査を行った。この結果から 学校に対して保護者が何を期待しているかが伺われる。

挑戦学習の課題がどの程度定着したかについての設問に対してはプロ野球やけん玉・フリスビー・折り紙・キャッチボールなど娯楽的な課題がまずあげられ 続いて服のたたみ方・皮むき・ドライバーの使い方など実用的な課題があげられていた。

どのような課題に挑戦させたいかという設問ではお金の使い方・洗濯・調理・針仕事・ひも結び・時計・箸の使い方など生活上必要なことがもっとも多く 漢字の読み・英単語・計算・都道府県名など学習的要素の強いものがこれに続いている。余暇利用的なものとしてはジグソーパズルをはじめ20種以上の課題があげられており 生徒それぞれの嗜好にあわせて課題に挑戦させたいという思いが感じられる。また他の友だちが挑戦し合格したものに今度は挑戦させたいという思いも見られる。

最後にどのような場所へ遊びに行っていきたいか（連れていきたいか）との設問についてはボウリング場・プール・お祭り・デパートなど公共の場所 行ったことのないいろいろな場所というように とにかく様々な経験を積ませたいとの思いが見られる。このほかに 友だちの家・人と出会えるような場所といった多くの人と関わりがもてるようにという願いも感じられた。

ただ逆に「ありません」「遊びにつれていくことがない」といった意見が少なからずあった。これは障害者の生活環境の整備という課題とともに 学校におけるより多くの生活経験の指導が求められているということであろう。

(荒 木 敏 彦)

(3)「ほんもの学習」のとらえ方

今年度新たに「ほんもの学習」をMTの内容の一つに取り入れることにした。その経緯については先に述べたとおりであるが 実践していくにあたりこの「ほんもの学習」を以下のような観点でとらえることにした。

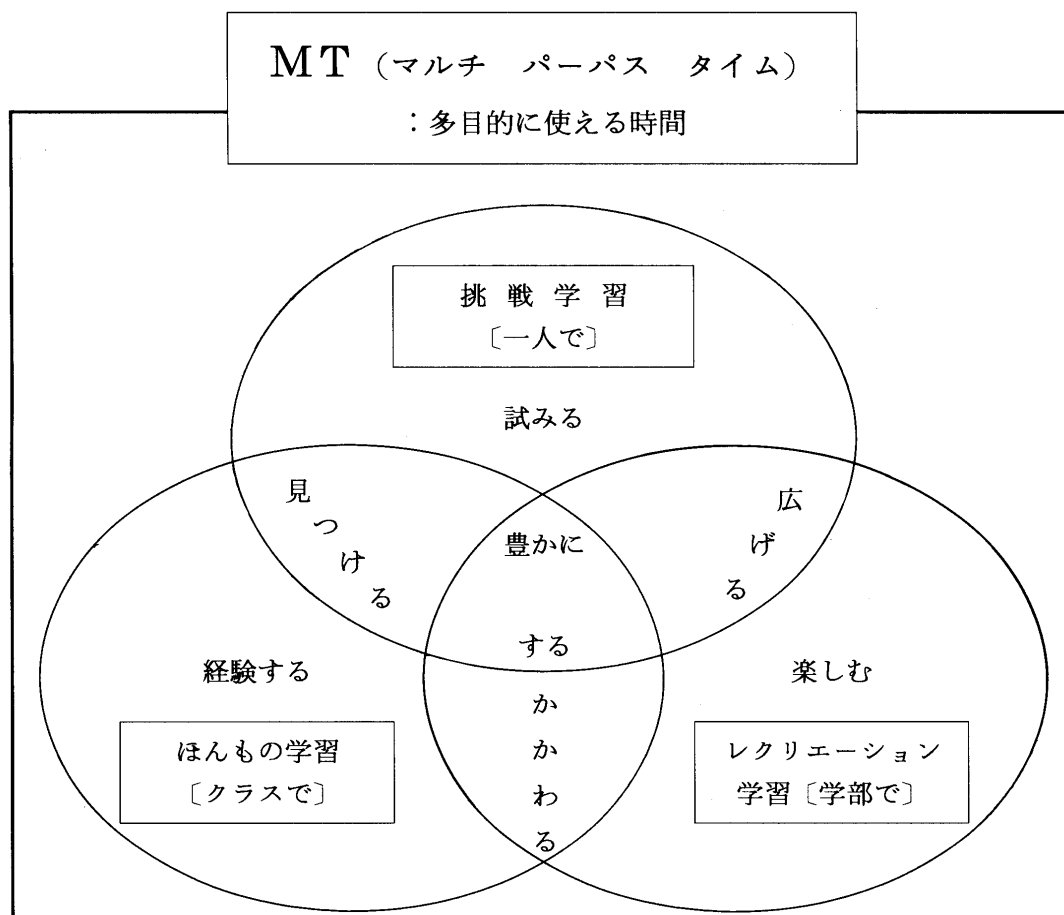
① 「ほんもの学習」の位置づけ

イ 教育課程上のMTの位置づけ

高等部の時間割

曜 限	月	火	水	木	金	土
	学 級 朝 礼					
1	全 校 集 会	中・高朝の会	高 朝 の 会	全 校・集 会	高 朝 の 会	中・高朝の会
2	グループ学習	実 習	グループ学習	グループ学習	実 習	M T
3	グループ学習	実 習	体 育	グループ学習	実 習	M T
4	生活 養訓	実 習	体 育	生活 養訓	実 習	生 活
	給 食					
	清 掃					
5	実 習	芸 術	ク ラ ブ	音 楽	生活 美術	
6	実 習	生 活		生 活	生活 美術	

ロ MTの中における3つの学習関係



② ねらい

この「ほんもの学習」を一言で説明するならば「余暇生活を想定した実体験重視型の学習」と言える。そこで「ほんもの学習」では事前学習よりも まずは実際の活動場面で経験（ほんものの体験）をすることで

- イ 自分にあった余暇の過ごし方を見つける機会とする
- ロ いろいろなものごとに対する興味や意欲を高め 自己決定する機会とする
- ハ 挑戦学習などで今まで学習してきた力を試し 発揮する機会とする
- ニ 互いに助け合い 認め合う機会とする
- ホ 教師が「生徒のありのままの姿」すなわち「今何ができ 何ができないか」を客観的にとらえる機会とする

以上の効果を期待し実践することにした。

③ 内容および方法

先に述べた位置づけやねらいにもとづき「ほんもの学習」の年間学習計画を表Ⅳ－２のように立案し 実践を通してその内容・方法について検討した。

表Ⅳ－２

年 間 学 習 計 画

学 期		1	2	3
MT	学習 集団			
挑 戦 学 習 （発表は個人で）	高等部 全 員	挑戦学習Ⅰ ・電卓 ・アルファベット ・ディズニーランドマップ覚え ・ケン玉 ・衣服のたたみ方 ・ひも結び ・ゴルフ ・フリスビー	挑戦学習Ⅱ （夏休みの宿題 一人2課題） ・英単語 ・カラオケ ・マーク覚え ・詩の暗誦 ・ジグソーパズル・フラフープ ・釘打ち ・洗濯 ・楽器演奏 ・盆踊り	挑戦学習Ⅲ （冬休みの宿題 共通課題） ・百人一首 挑戦学習Ⅳ ・英会話 ・カラオケⅡ ・大相撲博士 ・虫博士 ・皮むき ・はんこ押し ・筋肉番付 ・マット運動
	Aホーム （1学年）	← 自分の力で作ってみよう → ← クラスのみんなで出かけてみよう → [校内] ・フレンチトースト・デザート作り [校外] ・焼そば作り ・カラオケ大会 ・ゲーム（トランプ、オセロ） ・カラオケ ・展覧会		
ほ ん も の 学 習 （クラスで）	Bホーム （2学年）	← 友達の好きなことをみんなでやってみよう → [校内] ・卓球大会 [校外] ・デザート作り ・カラオケⅠ ・喫茶店 ・ボウリングⅠ ・ボウリングⅡ ・ボウリングⅢカラオケⅡ ・書き初め大会 ・お弁当作り ・カラオケⅢ		
	Cホーム （3学年）	← 史跡めぐりに行ってみよう → [校内] ・玉泉園 [校外] ・成巽閣 ・歴史博物館 ・忍者寺 喫茶店・展覧会 ・昼食会		
レ ク リ エ ー シ ョ ン 学 習 （学部で）	高等部 全 員	※（詳しくはレクリエーション学習の実践のページに記載） ← エアロビクス体操 → ← ゲ ー ム → ・集合ゲームなど ← フォークダンス → ・盆踊りなど ・カルタ取り（百人一首） ・ウォークペースボール		

イ 活動時間

「学校週5日制」に対応した休日の過ごし方を学習するためにも 土曜日にMTの時間を設定することにした。基本的に土曜日の2～3時間目を活動にあてているが 生徒が自主的に活動する姿を望むこの学習においては 時間的なゆとりが不可欠となる。そこで今年度は 必要に応じて時間割りを入れ換えることで対応することにした。

そのためボウリングなどの校外学習では 現地集合・解散という活動を取り入れることが可能となった。また焼きそば作りなどのように 昼食を作って食べるという活動も 実際の生活場面に即した日程で設定することができた。

ロ 活動内容の設定

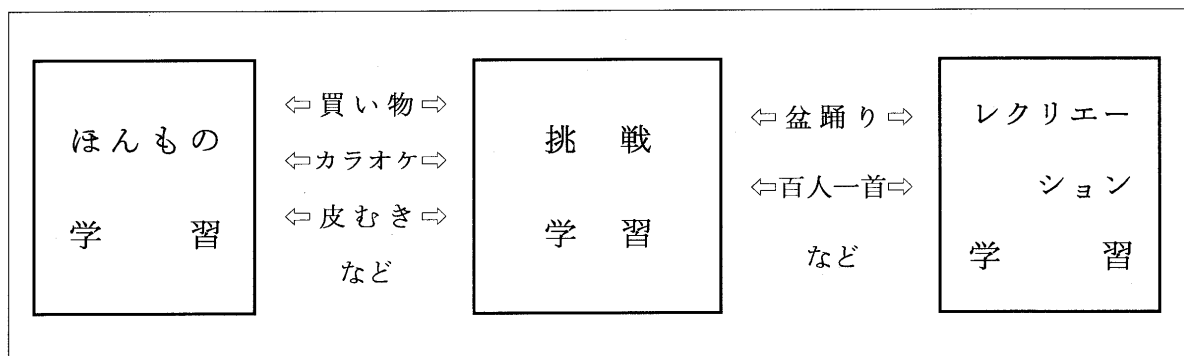
- ・「ほんもの学習」では基本的にクラス〔1学年1クラス（9～11人）〕単位で学習を展開する。実施日を設定する上で対応しやすい。また生徒一人一人に活動場を提供しやすく さらにグループ化することでより個に応じた課題の設定が可能になると考えた。それにより生徒どうしが協力し合う時間になることに期待した。
- ・各クラスの生徒の実態を考慮したうえではあるが A～Cホームと学年が進むにつれて想定する余暇時間や場も変わり 活動内容やねらいも大まかに推移する。

A ホーム	B ホーム	C ホーム
家での生活 ⇨ 休み時間・休日 ⇨ 卒業後の生活		
調理等	ゲーム、卓球等	ボウリング等 史跡めぐり、公共機関利用等

- ・他のMTとの関連性もある。「ほんもの学習」は基本的に事前学習にあまり多くの時間をとらないが「挑戦学習」で身につけた力を発揮する場でもある。つまり「挑戦学習」が「ほんもの学習」の事前学習になる。例えば「挑戦学習」での果物の皮むきが「ほんもの学習」のデザート作りにおいて事前学習としていかされ その課題に挑戦した生徒にとっては意欲的に参加できる活動となった。

「挑戦学習」の課題が「ほんもの学習」から生まれる場合もある。カラオケもその一つである。実際に経験したことは生徒にとってはイメージしやすく 課題を選択する際の動機づけになった生徒もいた。

また「挑戦学習」と「レクリエーション学習」についても 同じような関連性が見られる。



ハ 活動上の留意点

この学習では教師は前面に出ることをできるだけ控え 生徒の行動を見守る姿勢で活動に同行する。必要以上の援助はしないよう留意したい。

また基本的に 生徒にはできるだけ一人ずつの活動場面を与えていきたい。困難な場合は 他の生徒に援助するように促す。

④ テーマとの関連で

高等部は卒業し社会に出るまでの仕上げの段階であり 大切な意味あいをもつ3年間であることはいうまでもない。卒業までに一つでもできることを増やしたいと思う反面 個々を見れば これまでにできるようになったこともたくさんある。これらは生徒の財産であり 卒業しても何らかの形で生活の中で生き続けていってほしいと願う。そのことが自分らしく生きることであり 豊かに生きることと言えるのではないか。

本校高等部では挑戦学習を代表とするMTという学習の時間に 生徒一人一人がそれぞれのレベルでいろいろな課題に取り組んできた。皮むきができるようになり 家で料理を手伝い家族の一員としての役割を果たしている者、時刻表を覚え旅行という目的にむかって仕事の励みとする者、ジグソーパズルで自分の時間を過ごしている者、これらが 卒業後も余暇時間などの生活にいきづいていることを知ると 在学中の経験がいかに大切なものであるか改めて考えさせられる。

しかしこのように自分の好きなことや持てる力を なかなか発揮できないまま漫然と生活している者も少なくない。いうまでもなくこれらの力を発揮させるためには 本人の意欲も大切だが とりまく家庭や職場 地域などの環境が重要なポイントになってくる。卒業して環境が変わることによって したくてもできなかったり できることが限られてくるのが現状である。

この環境の変化に対応することが苦手な本校の生徒にとって 残された3年間で何をすべきなのか。できないことをできるようにと一つでも多くの課題を克服することは勿論であるが まずはもっといろいろな経験を数多くしておくことが大切なのではないか。様々な環境の中で 今自分のできることをいかしながら経験しておくことが卒業後の生活の幅を広げることにつながると考えた。

今回「ほんもの学習」というMTの時間の中で 生徒は実際の生活に近い環境に自分を置いて活動をしてきた。ただ先生につれていってもらったのではなく 「クラスみんなで行った。自分でやってみた」という成就感が この活動を有意義なものとしている。それが再び同じ様な場に立ったとき 自分のしたいことを選択したり 目的を持ち自分のできる範囲で主体的に行動する姿につながる。つまりこの経験こそが 将来の生活の事前学習となりうるのである。また活動を通して生徒が助け合ったり教え合ったりすることで自分や他者を認める気持ちを育んでいく。改めて述べるまでもなく これらの効果は「ほんもの学習」によってのみ得られるものではなく 他のMTや学校教育全体、生活環境全体の中から育つものではあるが 全体のテーマである「豊かな心と生活をめざして」と結びつけて実践を試みることにした。

(山 崎 晴 生)

2. 実践例（ほんもの学習 挑戦学習 レクリエーション学習）

ほんもの学習

（1）Aホームの実践

「自分の力で作ってみよう」

① 生徒の実態

Aホームは男子5名、女子6名の計11名で構成されている。このうち自閉的傾向の生徒が半数おり この中には会話が十分できない生徒もいる。しかし ほとんどの生徒が何らかの方法で自分の意思を伝えることができ 教師の指示を聞いてクラス全体で行動することもできる。リーダーとなれる生徒が少なくやや消極的ではあるが 教師の働きかけによっては意欲的に活動できる生徒もいる。

日頃から家の手伝いをしっかり行い 母親が不在であっても簡単な食事の準備などができる生徒もいるが ほとんどは家の仕事全般をあまり経験していないのが実情のようである。また外出や買い物などを取り上げてみても 一人で行動できる生徒は少なく 家族に助けられて生活をし 行動している様子が伺える。

② 題材設定の理由

- ・一年生でもあり身近な課題を取り上げたいと思い 一学期は「調理」を行うことにした。家庭ではどうしても家族の援助が大きく 受け身の生活をしてきているのでこの調理の活動を通して「自分の力で作ってみる」という経験や力を養いたいと考えた。また材料の買い物などにもグループで取り組ませ 金銭についての意識を持たせることも試みたいと考えた。
- ・二学期は家族で楽しめる「カラオケ」を取り上げることにした。本校の生徒は歌がとても好きで日頃からいろいろな場でカラオケを楽しむことができる。しかし Aホームの場合 人前で一人で歌うことが苦手だったり音に対して極端に意識したりする生徒もおり もっともっと身近なものにできないだろうか考えた。最初は校内にあるカラオケ設備を利用して「みんなで歌う」 次に「友達や先生と二人で歌う」 最後は「一人で歌う」という手順をポイントにして活動させる。みんなが楽しめるようになったらカラオケスタジオ等にも出かけ 学級で経験したことを発展させ さらに家庭でも家族とカラオケを楽しむことができればよいと考えている。
- ・三学期はトランプやカルタ オセロや将棋などの「ゲーム」を取り上げることにした。最近ではテレビゲームなどが子どもたちの遊びの中心になり 家族や友達と一緒にやる室内ゲームなどは忘れられがちになっているが この活動を通して新しい遊びを覚えてほしいと考えた。生徒の能力差もあるので一人一人が楽しく参加できるような内容や方法を工夫し実践したいと考えている。
- ・その他として「校外学習」という内容も取り上げ 年間を通して経験させていきたいと考えている。

③ 活動内容

Aホームでは学期毎の課題を設定したが、ここでは一学期に行った調理の活動についての実践を述べたい。

調理の活動では、まずどのようなメニューをみんなで作ったらよいかを話し合った。各自がこれまでに作ったことのある物や、今回作ってみたいと考えている内容について意見を出し合った。次にその中から「自分の力で作ってみる」というこの活動のねらいに適した内容をみんなで話し合い、最初は「フレンチトースト」を作ることになった。次回以降の内容については、初めから全部決めないで一つ作ってみて反省し、また次のメニューを考えることにした。

イ フレンチトースト作り

この学習では、各自が自分のフレンチトーストを作るということを確認し、必要な材料、作り方、用具などの説明を行った。そして2つのグループに分かれてそれぞれが準備をすることにした。材料の買い物は時間が取れず、教師が行うことになった。

作業としては、卵を割りときほぐすこと、分量の牛乳や調味料を計量したり加えたり混ぜたりすること、パンを決められた大きさに切ったりホットプレートの操作をすること、出来上がったつけ汁にパンをつけ、ホットプレートで焼きお皿に盛り付けるなどである。一つ一つの作業は各自に自分の分を行わせ、一人でできない場合は友達に援助させるようにした。

卵割りの作業では $\frac{1}{3}$ の生徒は殻と一緒に入ってしまったたり卵をつぶしたりという様子であり、まだまだ経験不足であった。ホットプレートの操作では温度の調節などが難しく、一人でできる生徒は少なかった。包丁の使い方は切るものがパンということもあり、何とか自分でできていた。焼き方ではパンを真っ黒に焦がす者は一人もおらず、フライ返しや箸を使って何とか裏返しすることもできていた。

これらの活動を振り返ってみると、今回は時間的な余裕がなくて教師が材料を準備しなければならなかったことが残念であった。フレンチトーストは手軽にできるメニューであり、ガスを使わなくてもホットプレートを使ってできるので何度か経験すれば手順を覚え、一人でも作ることができるようになると思われる。

ある女子生徒は学校で作った後、家庭でフレンチトーストを自分で作り、家族のみんなにサービスしたようで、「とてもおいしかったです」と連絡帳を通して母親からの報告があった。

このようにして学校で経験したことが家庭でも実践でき、家族の人達からも認められることで「また作ってみよう」という意欲にもつながると言える。更には自分でできることが増えることにより自信がつき、生活にも広がりが見られるようになると考えられる。

ロ 焼きそば作り

フレンチトースト作りの後、次に何を作ったらよいかをみんなで話し合った。前回よりやや作業内容が難しく、しかも全員が作業に参加できるものを考えた。十分な時間が取ればご飯を炊いておにぎり作りなどに挑戦したかったのだが、学校行事の都合で短時間で作業をしなければならなくなったので焼きそばを作ることになった。作業のグループは前

回と同じにした。

材料は相談の結果 キャベツ、もやし、肉、ニンジンなどを焼きそばに入れ 盛り付けた後 青のりや紅しょうがをのせることになった。買い物はグループ毎にしたかったが時間の関係で女子生徒1名と男子教師で行った。生徒に買い物のメモとお金を渡し できるだけ生徒が積極的に買えるような働きかけをした。

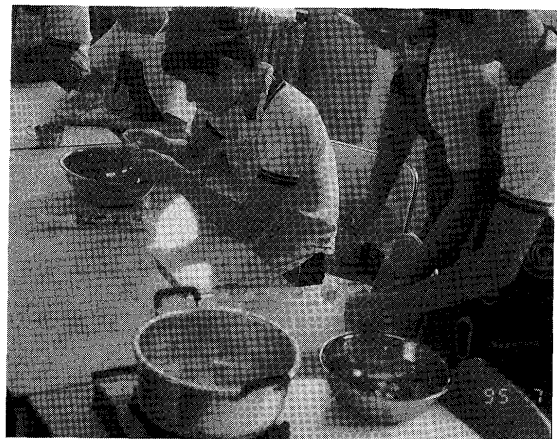
焼きそば作りでは 野菜を洗ったり切ったりという作業、炒めたり盛り付ける作業がある。これらの作業の様子をみるとニンジンの皮むきは皮むき器なども使ってほぼ全員が何とかできていたが 薄く切ることは難しく 特定の生徒しかできなかった。キャベツや肉を切るのはほぼ全員ができていたがそれでも前回のパンを切るようなわけにはいかず 補助が必要な生徒もいた。また野菜や麺を炒める作業では 炒めることはできても炒める順番や火の通り具合の判断ができず 指導者の指示が必要であった。更に出来上がった焼きそばをお皿に盛り付ける様子を見てみると 量の多いものや少ないものができてしまい 適量をしかもほぼ均等に盛り付けるには援助が必要であった。

このように一人一人の作業能力には差があり 少し援助も必要ではあったが 全員が野菜切りや炒める作業ができたことで「自分の力で作ってみる」というねらいにわずかでもせまることができたのではないかと思っている。

男子生徒の中には家庭で自分が中心になり家族みんなの昼食として焼きそば作りを試みた者もあり 学校での実践が「自分にもできるんだ」という勇気づけになったと考えられる。今後も機会をみつけ 何度も経験してみることで手順や方法を覚え 一人でも焼きそばを作ることができる生徒が増えるのではないだろうか。

ハ フルーツ白玉作り

一学期最後の活動ということで以前から意見として出ていたデザート作りを取り上げた。具体的には「フルーツ白玉」を作ることになったわけだが 活動は今までと同じく2つのグループに分かれて行うことにした。今回は準備の時間を十分にとることができたので 買い物もグループ毎に行うことにした。白玉作りに必要な材料のメモを作らせ お金も渡し 近くのスーパーマーケットを利用して自分たちで買い物に挑戦させた。買い物につい



くるくるまるめて 白玉づくり

ては指導者は一切口出しをせず 生徒達の様子を観察していたが これまでに買い物を経験したことがある生徒が中心になり メモを見ながら品物や数を確認していた。学校へ帰って買い物した品物とお金の点検を行ったが 両グループとも正しく買い物ができていた。

フルーツ白玉作りではまずみんなで白玉を作り 次にりんご、キウイ、バナナなどのフルーツを切り 最後に缶切り（桃の缶詰）をするという順に作業を行った。

白玉作りでは粉に水を少しずつ加えながらこねるということをしたが 粉を指先で触っ

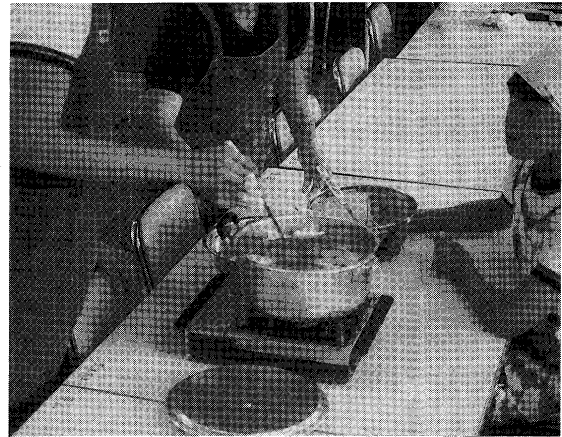
ているだけの者や手で握っている者など様々であり 最後に指導者がこねあげて仕上げをした。

次に丸める作業をしたがこれがまた難しく 大きいものや小さいものができ 形も様々でユニークな白玉の出来上がりであった。それでも自分の物は自分で丸め ゆであげることにしたので 各自が危ない手つきでおたまを使ってお湯の中から白玉をすくっていた。

フルーツの皮むきや切る作業では日頃から包丁を使っていない生徒が多く 思ったより時間がかかっていた。缶切りはみんなで少しずつ経験してみた。

盛り付けは各自で行い それぞれに工夫されたフルーツ白玉が出来上がった。汗をかきながら作ったフルーツ白玉ではあったが 冷たくてとてもおいしく感じられた。

この活動を通して感じたことは「包丁を使う経験が少ないこと」であった。果物など切ることではできても皮をむくことが難しい生徒が多く これからも挑戦学習の課題として取り上げてみたいと思った。また後片付けについては自分の使った食器は決められた場所までは一人一人が運んだが 洗ったり拭いたり片付けたりする仕事は一部の生徒が中心になって行った。時間をかけて洗うことはできても手際よく作業することは難しかった。



上手にすくって ヨイショ！

④ まとめ

本校には教室としての調理室がなく これら調理の活動は給食室を利用することから土曜日に行くことにしている。今年度より第2 第4土曜日が休日となったこともあり 上記の3種類のメニューしか実践できなかったことが少し残念であった。

これまで家庭科の授業として行ってきた調理実習ではどうしても作ることに力がそそがれがちであった。しかしこのほんもの学習では実際にやってみることに重要性に着目していることから 生徒一人一人の参加の様子やつけさせたい力をしっかり把握し この活動をきっかけにして家庭でも継続して練習したり果物や野菜の皮むきをしたりコップを洗ったりと この学習以外の場でもより多くの経験をさせるようにした。

今まではあまり関心を示さなかった生徒も家庭で母親の手伝いをするようになったり遠足の時には自分でおにぎりを作ってきたり一人でおやつの買い物に出掛けたりするなどわずかではあるが生徒達の生活の中にこの学習による成果がみられるようになってきた。このようにして生徒達の中にまかれた種がやがては芽を出し 花を咲かせるように育てていきたいと思っている。そして今後はクラスだけではなく 活動内容に応じた学習集団でパン作りやうどん・そば作りにも是非取り組んでみたいと考えている。

(谷 内 厚 子)

(2) Bホームの実践

「友達の好きなことをみんなでやってみよう」

—— ボウリング・カラオケを中心に ——

① 生徒の実態と題材設定の理由

Bホームは男子5名、女子4名の計9名のクラスである。学校生活の中では比較のおとなしくやや消極的な生徒が多い。特に休み時間は自分で好きなことをみつけて遊ぶ生徒は少なく、漫然と時間を過ごしている生徒もいる。また教師がいないと友達どうしのかかわりは少いクラスである。休日や帰宅後の家庭での過ごし方においても同じようである。

そこでクラスのMTの時間では、友達の好きな遊びや得意なことを一緒に経験し、休日や休み時間のように過ごしてみることにした。「友達の好きなこと」は生徒にとって馴染みやすく、自分の生活にも取り入れやすいのではないかと考えたからである。

具体的な活動内容については、まず一人一人から好きなこと・得意なこと・行きたい所を聞き出した。「野球」「調理」「カラオケ」「レジャープール」「ボウリング」「ハンバーガーショップ」など、予想以上に活発な意見が各々の生徒から出された。その中から今回は「ボウリング」と「カラオケ」を中心に活動を行うことにした。この2つは生徒の中でも特に人気があり、卒業生の余暇の調査においてもよく利用される施設であることから、生徒の興味や実態にあっている活動と思われる。活動の中では、バスの利用や申込みの手続き、お金の支払いなど、社会的なかわりも体験させたいと考えた。

また「卓球」や「調理」など校内での活動も計画した。これらの活動を通して生徒どうしがかかわりを深めたり、休み時間や家庭での生活に反映していくことを期待し、以下の実践を試みた。

② 活動内容

Ⅰ 「卓球」

N男は毎年「ゆうあいピック」の卓球競技に出場しており、その腕前はクラスのみんなが認めていた。今年も5月の大会に出場を予定していた。そこでMTの時間にクラスの全員で卓球をし、その後も教室に卓球台を置いてみることにした。

最初は教師が相手をしてしたが、しばらくすると、普段は椅子に座ってばかりのY男がA子とネットを張り二人でプレイするようになった。その後、多い時には4人が台を囲んでいる休み時間もあった。

そして6月にはクラスで卓球大会を行うことになった。1チーム3名の団体戦で行ったのだが、試合中自分のチームを応援したり、友達にラケットの持ち方を教えるN男の姿が印象に残った。

また、このことを学年通信に載せると、二人の母親から「放課後、時々教室で子どもと卓球をさせてほしい」との申し出があった。子どもが好きなことを見つけることは、親にとってもやはり嬉しいことであり、それを共有したいとする気持ちからであろう。

Bホームの生徒の数名にとっては、卓球が休み時間の過ごし方の一つになりつつある。口数の少ないY男ではあるが、ラケットを黙って友達にさし出し、「一緒にしよう」と誘っている姿もよく見られるようになった。

ロ 「カラオケⅠ」

休み時間にテープレコーダーを囲んで聴き 過ごす生徒が3名ほどいた。また先の話し合いの中でも クラスのみんなでカラオケに行きたいという生徒が4名（3名は休日家族と行った経験あり）いた。ちょうど授業で衣服についての学習をした直後だったので「おしゃれをしてカラオケスタジオに行こう」ということになった。

幸い学校から徒歩3分の所にカラオケスタジオがあったので 事前に教師が依頼しに行き その際曲集の本を1冊かりてきて教室に置いた。休み時間になるたび本を見て選曲したり テープを聴いて練習している生徒もいた。学校にもカラオケシステムはあり経験しているが やはりほんもののカラオケスタジオに行ったことのない生徒にとっては 学校以外でカラオケを歌うことにイメージがわからないようであった。

しかし当日は私服に着替えたせいも カラオケ未経験の生徒もお出かけ気分喜んで学校を出発した。スタジオでは最初 きらびやかな雰囲気、に圧倒されていた生徒も次第に友達の歌に拍手したり 黙々と自分の次に歌う曲を搜したりしていた。またジュースやお菓子も自分で買った。お金の計算はできないが 友達の真似をして自動販売機にお金を入れ好きなジュースを買って飲んだ生徒もいた。K男は自分でリモコン操作することを覚え全員の曲を予約していた。ふだん学校ではおとなしいM子が積極的にマイクを握り 歌詞がわからなくなった友達と一緒に歌う場面も見られた。それぞれが私服を着て少し大人の気分を味わっていたようである。しかし初めての場所で 教師自身も生徒の行動を十分予想できなかったため 必要以上に指示したり 生徒も教師に頼りすぎる場面が多く見られた。

その後M子は夏休み前の挑戦学習でも「カラオケ」を進んで選択し また休日に商店街のカラオケ大会に飛び入りで参加し歌ったという報告があった。カラオケスタジオに行った経験が M子に自信を与えたようだ。

ハ 「ボウリングⅠ、Ⅱ」

ボウリングは9名中8名が今までに一度は行ったことがあり 4月当初の話し合いでも圧倒的に人気のある活動であった。やはり経験したことはイメージしやすく その範囲で生徒が選択していることが伺える。

「今度の土曜日 ボウリングに行こうか」という担任の一言で朝の会での話し合いが俄然盛り上がった。「何に乗って」「何処でおりる」「お金はいくら」などの質問に 何度か家族と行ったことのあるK男が答え話が進んだ。「おしゃれして行く」とA子が嬉しそうに言った。日程や持ち物についてクラスのたよりで保護者に連絡した。事前学習もそこそこに当日の土曜日となり学校を出発した。

教師としては「できるだけ生徒だけでさせてみよう」と活動を見守るつもりでいたが バスの乗り降り・運賃の支払い・靴のレンタル・申し込み書の記入・ゲームのルール・料金の支払いなどの場面で予想以上に戸惑う生徒達の姿を見て 結局は援助することが多くなり 必要以上の声かけに終始することになってしまった。

そこで2学期にもう一度ボウリングに行くことにした。前回の反省と1度経験したその効果に期待したかった。また生徒一人一人の課題を明確にし それを教師が把握した上で当日活動に同行し援助の場面を見極めるめやすにした。そして生徒には「先生は見ている

だけ。できるだけ自分達でやってみよう」と伝え 再び「ボウリング」に挑戦することにした。

・現地集合・解散

当日K男とK子はバス 家が近くのS男は自転車でボウリング場まで来た。前回自信がなく母親に迎えに来てもらったM子は今回 帰りだけは一人でバスに乗って帰ることができた。その他の生徒は保護者の送迎か 学校から教師と市内バスに乗って集合した。

・受付申し込み

各グループのリーダーが友達の氏名や住所を記入したが クラスのリーダー的存在のK男が「一般・学生」の欄が理解できず 初めて教師に援助を求めてきた。

そして他のリーダーにはK男が教えていた。

・靴のレンタル

N男は履いてきたズックの底を見て 機械に表示してある数字とサイズを照らし合わせて借りた。戸惑っているN子やY男には それぞれのリーダーが進んで教えていた。自分のわかることに関しては 友達に教える余裕がその他の場面でも見られた。

入場してこの時点までで40分かかったが ほとんど教師に頼ることなく リーダーを中心にレーンに行き荷物を置きボールを選んで持ってきた。自然に9人がまとまって行動しはじめ ゲームにまでこぎつけた。

・その後

今回2度目のボウリングでは前回の実体験が事前学習としていきっており 生徒は見通しを持って積極的に活動できた。援助する教師も生徒の行動が予測でき 必要最小限の声かけで見守ることができた。

ゲームが終わって殆どガーターだったM子が「面白かった。今度お父さんとまた来たいな」という感想を話してくれた。スコア以上にほんものの華やかな場の雰囲気を楽しめたことや友達の手話をした充実感があったからであろう。

Y男の家では それからボウリングへ行くことが休日の過ごし方の一つとなった。休日のドライブ中ボウリング場の前を通った際 母親がクラスで行ったことを思い出して みたそうである。ボウリングをした次の日には日記にスコアがはさんであり 点数も良くなってきている。

K子は3年の友達と休日電話で連絡を取り その妹と3人でボウリングに行ってきたと母親からの報告があった。クラスで行ったことが自信となり 休みに友達どうしで行ってみることに憧れ 少し冒険してみたようである。



足のサイズは…何cm?

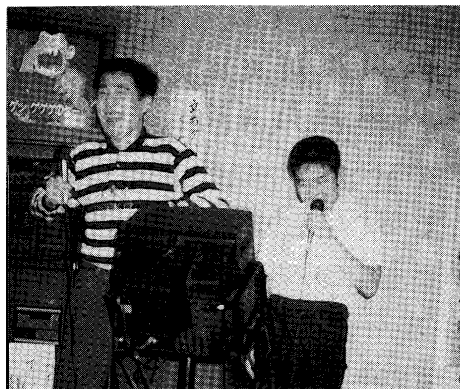


やっとゲームができるぞ!

ニ 「カラオケⅡ or ボウリングⅢ」

「今度のほんもの学習は何をしよう」と聞くと カラオケとボウリングに希望が分かれた。友達と行ったことのあるK子の「ボウリング場にカラオケもあるから分かれてすればよい」という意見で決定。いざ選択となるとまた迷い始める生徒もいたが 最終的にはボウリング4人カラオケ5人に分かれた。カラオケに関しては今回が初めての場所であるのでリーダー的な生徒に 営業時間や料金について電話で確かめさせた。

当日はボウリング場に着いてからそれぞれのグループで行動した。ボウリンググループの生徒は3回目の場所なので 靴のレンタルや申し込み用紙の記入そしてゲーム自体もスムーズに行っていた。カラオケグループでは はじめは教師が曲の予約方法を教えたが3人の生徒が自分で操作するようになった。前とは違う場でも「自分でやってみよう」とする姿が見られた。バスの利用なども含め確実に前回の経験がいきっており 手順を理解し自信をもって行動する生徒が増えてきた。友達どうし助け合う余裕も膨らんできたようであった。



みんな のってるかい！

その次の休日。カラオケを選んだN男とK男が家族と一緒にボウリングへ行った。またボウリングを選んだA子も同様に家族とカラオケに行ってきたと日記に書いてあった。

③ まとめ

以上のようにBホームでは 友達の趣味・好きなことを一緒に経験してみようという観点で クラス単位で様々な活動を 一人一人の持てる力の範囲で体験してきた。どの活動においても 家庭での休日等に還元している例がいくつか見られた。学校でしたことは家庭への提案になっている。子どもが好きなことを見つけることは 親にとっても望ましく もっと膨らませ伸ばしてやりたいという思いの現れであろう。

また学校生活では比較的小となしいY男やM子が校外での活動で予想以上に積極的に活動したり ほんもの学習を楽しみに普段の学習活動にもハリをみせる生徒達の姿が見られた。反対に机上の計算はできても実際の支払いの場面では援助を必要とする生徒もいた。

教師が一步ひいて生徒達だけでいろんな課題を解決しながら一つの活動を成し遂げていく中で 友達どうしのかかわりを深めただけでなく 一人一人が自信を持ち「また今度してみたい」という意欲につながったのではないだろうか。リーダー役の生徒にとっては人を思いやることの気持ちよさも何となく感じる事ができたようである。

しかしいくつか課題も残った。まず金銭の扱いや飲食 行動範囲の広がりなどによるトラブルがある。そのことを考えると ある生徒にとっては学習させることが適当でない場合もあるのではないか。また能力の差によって必要な経験の回数は違うのではないか。そして「友達の好きなこと」が 他の生徒にとっても楽しいものであったかどうか。

これらは今回クラスで実践してきたうえで生じた問題点ではあるが 教師にとってはこのほんもの学習を通して 生徒の実態や一人一人の将来の生活における課題を 改めて見つめなおす機会となった。

(山 崎 晴 生)

(3) Cホームの実践

「公共の施設を利用しよう」

① 生徒の実態と題材設定の理由

Cホームは男子4名、女子6名の10名で構成されている(内1名は長欠)。言葉のない生徒や極端に声の小さい生徒もいるが 全体としてはにぎやかなクラスである。また互いのかかわりあいという点でみると 女子はある程度かかわりあって遊ぶことができるが 男子はあまりできない。

社会への巣立ちが間近になった生徒達にとって社会の中で自由に行動できるということは社会参加の大きな要素となっている。しかし現実には自分で目的をもってどこかへ行く、あるいは公共の施設を利用するといった経験が少なく 「行ってみたいところは？」と聞いてみても過去に行ったことがあるところしか答えられない生徒がほとんどである。やはりできるだけ在学中にそういったことの練習をしておくことが大切であると考えられる。

Cホームではこの考え方からMT(ほんもの学習)の内容として「自分で公共の施設を利用する」ことを取り上げた。

② 内容

具体的には2時間という時間的制約もあることから学校の近くの歴史的な建物を見学することにした。実際に行くにあたって教師が気をつけたことは次の3点である。

- i) 教師が先頭に立って引率はしない
- ii) 団体としての行動は極力少なくする
- ii) 個人で受付をさせる

以下具体的に生徒達の様子を述べていく。

イ 玉泉園

本校は名勝兼六園のすぐ近くにあり 学校の回りにも歴史的な建物が多く存在している。この玉泉園もその一つであるが あまりに近くにあるためかえてこれまで行く機会がなかった場所である。

当日は朝礼で行き先の確認をし 1時間目の授業を終えてから生徒達はそれぞれ着替えを済ませて玄関に集まった。クラス単位でどこかに行くということは今まであまりしていなかったことなのでどの子の表情にも期待が感じられた。玉泉園はみんなの通学路の途中にあるので生徒達だけで行くのは難しいことではなかった。しかし受付ではどうしたら良いのか分からず 立ち尽くす生徒が何人もみられた。具体的には次のことが分からなかったようである。

- ・見学コースの選択(5コース)
- ・一般と高校生の違い
- ・団体か個人か

そこで見学コースの選択だけは教師が指示して抹茶・お菓子付きのコースにしたが 団体としてまとめて入場券を購入することはせず 個人で購入することにした。生徒達はどうかといえばよいのかとっさには分からなかったようでしばらく財布を握り締めて互いの顔を見合っていた。「早くしないと時間がなくなるよ」の声かけでK子が「入場券一枚下さい」

「一般ですか？高校生ですか？」「高校生です」というやりとりをして入場券を購入できた。それを聞いてT子が「高校生 一枚下さい」との言い方を考え出し 全員が入場券を購入することができた。最初に購入したK子にとって このやりとりをすることはかなり冒険だったと思われる。なお言葉のない生徒については教師が援助して購入した。

入場券を手に 中に入った生徒達は一様にほっとした安堵感のにじんだ表情をしていた。 玉泉園にて「けっこうなお手前で…」そして歴史の重みを感じさせる庭園をゆっくり散策し 茶室で抹茶をいただき 静かで心豊かな一時を過ごすことができた。

ロ 成巽閣

二回目のMTでは兼六園に隣接している「成巽閣」に行き 帰りに時間があれば喫茶店に行くという計画が話し合われた。当日は担任のI教諭が出張で かわりに級外のY教諭と一緒に参加した。外出するのは二度目ということもあり さっと玄関に集合した。その時一人の女子生徒が空を見上げて「先生 雨が降りそうや。傘はどうする？」と聞いてきた。教師の方から指示することはなるべく避けたかったので少し生徒達に考えさせ 話し合わせることにした。その結果もっている人は自分の傘をもって行こうということになり徒歩で成巽閣に行った。前回と違って受付が建物の中にあったため 靴をぬいでから受付をするということに気がつかず 生徒達はだいぶ戸惑っていた。後からきた観光客を見てようやく気がつき 受付に向かった。クラスの中で一番好奇心の強いT男が受付の前に立ったがどうしてよいか分からず困っていると クラスの会長をしているH子が看板を見て「私たちは高校生だから…250円だよ。だから250円払えばいいんじゃない？」とアドバイスしていた。そこで次々に受付を済ませ いざ中へ入ろうとすると 意外にもみんなにアドバイスしていたそのH子が250円を払うことができず 困っていた。受付の人や同行した教師の方も「彼女ならできるだろう」と思い込んでいたことがかえってH子の負担になり 「分からない」ということを言えずにいたようである。この時は教師が援助してお金を払わせたが H子は自分ができなかったことを気にする性格なので見学に影響しないよう配慮した。

同行のY教諭が社会科担当で歴史に詳しいので生徒達に分かりやすく説明してくれた。看板の順路にしたがって またいつも集団から離れてしまうT男を他の生徒達が気遣いながらの見学であった。この日は土曜日で観光客がたくさん入っていた。教室の中ならやかましい程の生徒達であるが 周りを意識した行動が見られたのはさすがに高校3年生だと実感した。



成巽閣にて「どうすればいいのかな？」



興味をもって見学する生徒 見学より後の喫茶店を楽しみにしている生徒など 反応は様々であった。見学に思いの外時間がかかり 帰りに喫茶店によっている時間がなくなった。生徒達に「次回は必ず行こう」と約束したが がっかりした様子が伺われた。成巽閣を出る頃 雨が降りだし「傘をもってきてよかったね」と生徒達は互いに話し合っていた。傘のない生徒もいたので二人で一本の傘に入って歩くといったことも良い経験になったのではないだろうか。

ハ 歴史博物館

2週間の現場実習を終えての第三回目のMTでは 生徒の意見を取り上げる形で県立歴史博物館の見学と前回時間の都合で行けなかった喫茶店行きを計画した。前日までの雨があがり絶好の外出日和となった当日 クラスの会長の日子を先頭に歴史博物館に向かった。到着して受付をしようとして次のような表示が目についた。

「一般…250円、大学生…200円、小・中・高校生…無料」

この「無料」という表示の意味が分からないのか「どうしよう」という困惑の表情がみられた。そこで「無料ってどういうこと？」と聞いてみたところ一人だけ「お金 いらんがや」と答えることができた。「ほうや。“ただ”なんやね」と応答すると生徒達の表情がほっとなごんだのが印象的であった。ただそのために受付用紙に記入するということが教師に求められ 個人での受付はできなかった。

中に入っているいろいろな展示物をみている生徒達はなぜかばらばらになることはあまりなく なんとなくひとかたまりになって順路を進んでいた。同じクラスの仲間という意識が働いているのを確認できた思いだった。

見学を終えて念願の喫茶店に向かった。この時の生徒達の表情はとても生き生きしていて いかにも“楽しみにしている”という思いが伝わってきた。喫茶店に入ってから気があった者同士が一緒にテーブルに座り 注文する時もそれぞれ自分で欲しいものを言っていた。品物が運ばれてきて受け取った瞬間に一気に飲んでしまう者や おしゃべりに忙しくあまり飲めない者もいたが それぞれ楽しい時間を過ごせたように思う。



喫茶店で「何を注文しようかな」

ちなみに生徒達が注文したものはコーヒー、アイスコーヒー、ジュース、クリームソーダ、コーヒーフロート等であった。

ニ 妙立寺（忍者寺）

現場実習、運動会、表現会と行事に追われて夏休み後はなかなかMTの時間がとれなかったが 11月の下旬になってようやくその余裕ができた。そこで一学期の経験の上に立ち 今回の見学場所の選択にあたっては公共の交通機関を利用することを条件にした。そして生徒達との話し合いの上で妙立寺(忍者寺)の見学を実施することになった。ただ見学先の方針もあって個人の受付ができないことになり やむを得ず今回も団体での受付となった。

当日は運よく絶好の外出日和になり バスに乗り込むのがもったいないくらいであった。しかし生徒達の表情にはバスに乗っていく期待感があふれていた。バスに乗り込む際 意識的に回数券は利用せず 車内で両替機を使えるかどうか様子を見ることにした。(バス代は200円だがほとんどの生徒は1000円札だけをもっていた) 予想通り自分から両替に行く生徒はいなかった。「早めに両替しなさいよ」の声かけでまず一人の男子が両替した。



忍者寺にて 記念撮影

でもその一人で他の生徒が続くことはなく3人ほどが両替してからようやく「自分も」という感じで次々と両替するようになった。またバスを降りる時にもせっかく両替したのにその小銭をいっぺんにつかんで料金箱にザーッと入れようとするなど またしても経験のなさを感じるようになった。

現地に着いてからは担当の方に予想以上の配慮をしていただき ゆとりをもって見学することができた。ずっと金沢に住んでいながら今回初めて妙立寺を見た という生徒が9名中7名いたこともあり みんな驚きと喜びとに満ちた表情をしていた。外に出てからY男が「卒業したら一人でまた来ようかな」とつぶやいていたのが印象に残った。

見学を終えてから すぐ近くの茶屋風の趣を残している土産物屋を兼ねた喫茶店に入りそれぞれ好きなものを注文した。現代っ子らしくメロンソーダにこだわる者もいたが 前回の喫茶店とは違って「ぜんざい」「抹茶」「アイス抹茶ミルク」「甘酒」など その場の雰囲気合ったものを注文した生徒もあり なるほどと思ったものである。

帰りは外出日和ということもあって徒歩とバスの2通りの方法を選択させた。結果は徒歩5名 バス3名であった。徒歩を選んだ生徒の中に心臓疾患をもっているM子もいたが全員元気よく帰ることができた。この間Y男とH子はみんなから少し離れて歩き ずっと二人でしゃべっていた。この歩きながらの会話もまたいい思い出になったようである。

一学期の実践のうえにたって ①公共の交通機関を利用して ②帰りの方法を選択させた という2つの要素を加えたMTであった。

③ まとめ

本校の生徒達は今までにもかなりの数の施設を利用してきている。しかしそれはあくまで教師主導による“団体”での入場で 自分達はただ指示を待っていればよかった。当然のことながら自分で受付を済ませるということはほとんどなかった。実際に「無料」の言葉が十分理解できない生徒が多くいたのには少し驚かされた。

今回このような活動を取り入れ 実践できたことは生徒達にとって貴重な経験となり大きな成果を得たものと感じている。彼らの卒業後の生活(特に余暇生活)を考える時 在学中にできるだけ具体的な活動を想定し 一度は体験させることが大切であると思われる。その体験がよりよい生活を過ごすための必要条件になってくのではないだろうか。

(熊 野 嘉 子)

挑戦学習

(1) 盆踊り

① 課題設定の理由

7月に入ると 夏休みに行われる「いくゆう夏まつり」に向けて 全校集会や部朝の会で炭坑節の練習をする機会が何度かあった。大きな輪を作り みんなで踊る盆踊りはまさに日本の夏の風物詩の一つといえよう。音楽が始まると生徒たちは雰囲気を感じ取り 手足を動かしてそれなりに楽しんでいる様子が伝わってくる。

ところが 一人一人を見てみると雰囲気は楽しんでいるが 踊りそのものは曖昧な部分があり 音楽と微妙にずれていることがある。そこで 手本の踊りを見ながらでなく自分できちんと動きを覚えて堂々と踊ることができればもっと楽しめるのではないかと考え 課題として取り上げることにした。練習の時期としても 子どもたち自身が夏まつりで上手に踊りたいという目標を明確に持つことができるので 一学期の終わりから夏休みにかけてが最適であると考えた。

② 課題提示および選択の時の様子

盆踊りは みんなが踊っていると自分も思わず踊りたくなるものだが 大勢の前で一人で踊るというのは緊張するより 何とも照れくさいものである。それでも 課題提示の際教師が法被を着て踊ったところ 音楽と同時に手拍子が起こり 生徒達の反応を感じることができた。

課題の内容は「炭坑節」と百万石祭りの時に流しで踊られる「金沢ホーヤネ」とした。特にこの課題を選択しなくても踊る機会はあるので 果たして何人の生徒が選択するかと思っていたが 9人が素早くプラカードの前に並んだ。挑戦といっても 盆踊りはどの生徒も経験があり これならできそうだからやりたいという心の現れであろうか。最終的には 3人は別の課題に移ることになり 6人が盆踊りに取り組むことになった。

③ 生徒の実態と練習の様子

M子(3年・女)は 課題提示のときに仲の良いT子が真っ先に盆踊りを選んだのでつられるように列に並んだ。結果的にT子の方は別の課題に移ることになったのだが M子は「盆踊り、頑張るわ!」とかなり意欲を見せていた。課題を選択したメンバー全員で踊ってみたところ M子は友達の模倣をしながら輪の中に混じってはいるが 喋ったり余分な動きをしたりで あまり集中して踊ることができなかった。一人ずつ踊らせてみると 炭坑節の動きの順序をよく理解していないことが明らかになった。

夏休み中は楽しみながら練習できるように 曲を録音したテープとみんなで踊っている様子を撮影したビデオ、練習の記録用紙を全員に渡した。このときに 一日に何度も踊るよりも一回ずつでよいからなるべく毎日踊るように伝えた。M子も嬉しそうにテープを受け取ったが 残念ながら家ではあまり練習できなかったようである。

④ 発表の様子とその後

M子は盆踊りの発表を結局三回行うことになった。つまり はじめ二回は不合格で 三回目に合格したのであるが その間のM子の様子について述べていきたい。

一回目は夏休み明けの9月に他の子と一緒に発表した が 練習不足のため まだきちん

と動きを覚えておらず不合格となった。この時点で 課題を「炭坑節」一曲に絞った。二回目の発表でも やはり不合格だった。その時はさすがにがっかりしたように見えたがその時間が終わると M子はそれほど残念な気持ちや焦りもない様子で「また昼休みに盆踊りしたい。頑張る」とケロッとしているので こちらものんびり構えて練習していけばよいと考えた。



盆踊り 発表の様子

その後 現場実習や運動会の練習など忙しい日々が続くことになるのだが 再々挑戦に向けて昼休みになるべく毎日炭坑節を踊ることを約束した。この時期になると盆踊りは何とも季節外れになってしまったが M子には昼休みは特別な用事がない限り 盆踊りをするのだという意識が生まれてきたようである。歯磨きを終わると 自分でカセットを鳴らして踊るようになった。他の生徒も いつもM子が盆踊りをしているので様子を見にきたり 一緒に踊ったりする子も出てきた。M子自身はそんな友達に気を取られて自分の踊りがおろそかになることがあるので 指導する側としては 動きの順序をまちがえずもっと集中して踊るように注意してきた。しかし 一人きりで踊っているときより楽しそうに踊っていた。そして毎日練習を続けていくと時々まちがいのもあるが ある程度正しく踊れるようになっていったM子である。

そして約2ヵ月後 秋も深まってきた11月初め三回目の盆踊りの発表を行った。M子はみんなの前で一人で踊るのでかなり緊張しており 思ったように踊れなかったのか 踊り終えた後「もう一回やりたい」とやる気を見せた。時間の都合でそれは叶えられなかったが いつも踊っていたことも認められ 晴れて合格することができた。目標を持って毎日練習してきた昼休みの時間は ただぼんやり過ごすよりも はるかに充実していたのではないかと考える。

⑤ まとめ

盆踊りは「踊る人」と「見る人」がいるのではなく 全員が「踊りながら人の踊りも見」立場にあり みんなで踊るからこそ情緒があるといえよう。大勢で踊っていても一人一人が主役の気分を味わうことができるのである。それは自己満足といわれるかもしれないが 他者とのかかわりの中で共に楽しむという点でレクリエーション的な要素も多く含んでいるのではないかと考える。

M子は3年生で 来年からは学校で盆踊りの練習をすることもなくなるが この経験を生かし 卒業後も「いくゆう夏まつり」や地域の盆踊り大会に出かけて踊ってほしいと思う。そのことをM子に伝えると返事ははっきりしないながらも 多少やる気があるのか 合格後も彼女は昼休みに炭坑節を踊っている。季節外れの盆踊りに苦笑いしながらも 本人が「盆踊りしたい」と自主的にしているので それもよいと思っている。

(山 野 道 代)

(2) カラオケ

① 課題設定にあたって

今回「カラオケ」を挑戦学習の課題として選んだのは「カラオケ」が次のような点において有効であると考えたためである。

- ・発声等のコミュニケーションに必要な機能の向上
- ・識字 詩の暗唱など国語・表現能力の向上
- ・自閉的傾向にある生徒の社会性の向上
- ・卒業後の余暇利用の選択肢を増やす。

歌唱による発語能力及び国語・表現能力の向上については既に多くの事例⁽¹⁾⁽²⁾が示されている。また社会性の向上については山本・井沢の研究⁽³⁾においてその効果に言及している。

さらに既に述べてきたように卒業後のQOLの向上に寄与するものを課題としてとりあげたいと考えた。本校卒業生に対して行った余暇時間の過ごし方のアンケートにおいて「カラオケ」が「休日の過ごし方」「趣味」「これから余暇時間にしてみたいこと」の項目で高い支持を得ていたことも今回の課題設定の重要な理由となっている。

② 課題提示及び選択の時の様子

教師が生徒に馴染みの曲「賽はなげられた」の歌唱パフォーマンスを行った後に 課題を提示した。課題内容は以下の通りである。

- ・課題曲と自由曲それぞれ1曲ずつ歌う。
- ・歌うのは1コーラスのみだが 歌詞はすべて暗記する。

課題曲を設けたのはこれから1曲でもレパートリーを増やしていこうとする態度を育てるためである。また歌詞の暗記を強いたのは国語・表現能力の向上とともにいわゆる「十八番（おはこ）」を作ってほしいためである。

発語機能の弱いK男 F男や音楽嫌いのS子などの参加を期待したが実際に参加を希望したのはT子 Y男 M子 T美の4名であった。特にT子は普段からカラオケが好きで選択の際に真っ先に集まってきた。同様にいつも元気なT美もうれしそうに列に加わった。意外だったのは 普段は引っ込み思案であり大きな声でしゃべらないY男とM子が参加してきたことである。

③ 練習時の様子

今回は夏休み中の課題であったため練習のほとんどは家庭でのものとなった。しかし学校でも休み前に2回練習の時間をとった。そのうち1回目は課題曲と自由曲の選択を行った。その結果課題曲は「あのすばらしい愛をもう一度」、自由曲はT子が「TOMORROW」Y男が「どんなときも」M子が「わたしがおばさんになっても」T美が「晴れてハレルヤ」を練習することになった。

家庭での練習のために課題曲と自由曲の歌詞カード 課題曲と自由曲のオリジナルとカラオケを交互に入れたテープ 家庭での練習方法とその様子を記録するためのチェック票を作成し配布した。休み中にも1回練習の時間をとったが夏休みあけには全員がほとんどの歌詞を覚えていた。しかしながら歌唱の姿勢が悪かったり声量不足の傾向が見られたりしたので発表までの期間 姿勢や発声を中心に練習を行った。

④ 発表時の様子

T美が現場実習のため2回にわけて発表の機会が持たれた。4人に共通して言えることは課題曲より自由曲の方がよく覚えられていた。サビの部分ははっきりとメロディーにのせて歌うことができた。という点があげられる。またマイクを通してはいえ大きな声でしかもはっきりとした発音で歌っている。Y男が拍手に対して手を振って応えるなど普段見られない面を見せてくれた。結果と



余裕のガッツポーズ

して一回目で全員が合格したがまだ歌詞が曖昧だったり声があまりでていなかったりなどの理由でパーフェクト合格はいなかった。

発表の際保護者に記入してもらったチェック票を紹介したが皆2～3日に1回は必ず練習しているようであり、中には家族がいなくても自主的に一人で練習している生徒もいるなど積極的に取り組んでいるようであった。

⑤ まとめ

この課題を始めるにあたって本来楽しくあるべきカラオケを課題としたことで却ってカラオケから遠ざける結果にならないかというおそれもあったが 昼休みの練習にも積極的に参加し 発表の際には皆いい表情を見せていた。この練習期間中M子が地元の祭りで自主的にカラオケ大会に参加して賞品を手に入れた。普段ボソボソとしたしゃべりしかせず「わからん」の一言しか返事しないY男が長い歌詞を覚え堂々と歌った。T子が表現会の劇中で多くの観客の前で自由曲を披露した。最近の楽曲はメロディーやリズム・テンポが複雑で曲を覚えるだけでも大変なのだが 皆メロディーに遅れまいと一所懸命な姿を見せてくれて 意欲を持って取り組んでくれたのがわかる。

残念ながら今回課題に参加したのが元々歌うことの好きな生徒ばかりだったようである。しかしこの課題の有用性は二学期にAホームで行われたほんもの学習でのカラオケへの取り組みからもわかる。みんなの前で歌うことなど苦手だと思っていたがほんもの学習のあと家からカラオケに行ったA子、言葉が不明瞭ながら積極的に参加していたK男・F男、音楽がかかるといつも耳を押さえていたのにマイクを持って歌ったS子など ここでもよい結果が見られた。

これらのことから個々の生活をひろげるために学校でもこのような指導が必要と考えられる。

(荒木 敏彦)

参考文献

- 1) 菅井邦明 熊谷英之 我妻伸也 (1986) 「歌遊びにおける言語行動の諸相と指導の観点」
日本特殊教育学会 第24回発表論文集
- 2) 音楽療法セミナー一覧 (第1回～第16回) 「第17回音楽療法セミナー発表資料」
- 3) 山本秀二 井沢信三 (1993) 『いわゆる「カラオケ」を用いた自閉症児の対人行動促進に関する検討』
日本特殊教育学会 第31回発表論文集

(3) 買い物

① 課題設定にあたって

1 回目は「計算器（電卓）の使い方」を取りあげた関係もあり 2 回目は「買い物」を課題とすることにした。

生徒にとって買い物は 家庭や学校で日常経験しているところであるが 一般的には友達や親 教師と連れ立って行くことが多く一人だけで行くことは 案外少ないのではないだろうか。また 買い物の場面は 品物を選んだり お金を払ったり おつりを貰ったりする複雑な活動となるため 生徒にとっても指導する大人にとっても困難さを感じる場面だといえる。

しかし 将来の社会的自立を確実にするためには 是非とも取り組まなければならない課題である。

今回は 品物を選ぶより 一人で買い物に行けることと千円から二千元程度の金額が扱えるようになることを主なねらい・内容とし 右に示すような票を作成した。この票に基づき 個々の生徒に応じた目標で取り組ませることにした。

② 課題提示及び選択の時の様子

新聞の折り込みやチラシを生徒に見せて 日常の買い物・おつかいが課題であること また買い物学習検定票(図Ⅳ-3)を提示し自分で目標を選定して取り組むことを説明した。

何人集まるだろうかと心配したが 前回の課題にも取り組んでくれたA君を含め4名が集まった。

4名はいずれも「買い物をしたい」とか「上手にお金が払えるようになりたい」など意欲的であった。また A男C男D子は 今までにも家族とよく買い物をしていた。

③ 練習の時の様子

一学期末に2回練習する機会があった。1 回目は スーパーマーケットのチラシを見せ品物とその値段が分かること 値段に合った金額を実物のお金で払うことについて練習をした。2 回目は およその数・大きい数が分かること 金種の異なる金額を数えることを中心にプリント学習をした。今回は とにかく一人で買い物に行けるようになることをめざすため 品物2個以上の合計金額を求める計算にはあまり重点をおかなかった。

1 回目の練習では全員がよくできたが 2 回目の練習では B男C男D子において概数

買物学習検定票						
級	段 階 表	実 施 し た 回 数				
		1回	2回	3回	4回	5回
10級	家の人といっしょ 買い物に行ける					
9級	家の人といっしょ・買 い物・お金をはらえる					
8級	自分ひとり・110円 自販機					
7級	自分ひとり・200円 自販機・おつり					
6級	自分ひとり・指示書 もって・500円以内・ おつり					
5級	自分ひとり・指示書 もって・1000円以内・ おつり					
4級	自分ひとり・指示書 もって・2000円以内・ おつり					
3級	自分ひとり・指示書な し・1000円以内・おつ り					
2級	自分ひとり・指示書な し・2000円以内・おつ り					
1級	自分ひとり・指示書な し・2つの店・2000円 以内・おつり					

〈ルール〉

- ⑦ 7級は必修課題です。
- ④ 到達級を決めましょう。
- ⑨ 易しい級から順に難しい級に進み
ましょう。
- ⑤ 実行した回数に○をつけましょ
う。
- ⑥ お金の払い方は、おつりのある払
い方でもちょうどの払い方でもよい
です。家の方で確かめてください。

個人目標

図Ⅳ-3

や大きい数について判断が正しくできなかったり 多くの金種や等価関係で混乱して数えられなくなり教師の手助けが必要な場面がみられた。

その後の練習は夏休みに入ることもあり 主に家庭で取り組ませた。本人や学級担任 親の意見を考慮して決めた個人目標（表Ⅳ－２）に基づき お金の数え方の練習や買い物体験を記録するドリル帳を作成し 活用させた。

休業中の登校日及び二学期初めにも練習の機会があった。この時は ドリル帳の解答合わせを行った。また 買い物体験記録を点検すると A男とD子については詳細に記録がなされており 買い物経験の質的向上が伺われた。一方 B男とC男については記録が大雑把で記載事項が不備なため 買い物経験の質的向上を確認することができなかった。

表Ⅳ－２

生徒名	学年	性別	経験の有無	数 処 理 能 力	個別目標	結 果
A	1年	男	経験あり	大きい数・概数・等価関係は確実	1 級	合 格
B	1年	男	経験なし	大きい数・概数・等価関係は不確実	5 級	再挑戦合格
C	3年	男	経験あり	大きい数・概数・等価関係は不確実	5 級	再挑戦合格
D	1年	女	経験あり	大きい数・概数・等価関係は不確実	3 級	合 格

④ 発表の様子

発表に当たっては 全員の前でサイフの中の金額を数えさせ その後 買い物の様子を収録したビデオを見てもらった。最後におつりの金額を表示させた。その間 休業中に取組んだドリル帳を審査員に見てもらい点検を受けた。

こうして 一人一人発表していった。

A男は 二千円までの金額について正確に扱い 買い物も2つの店で上手にできており 自信にあふれていた。その結果 パーフェクトはのがしたが見事合格であった。

B男については 千円までの金額について何とか扱うことはできていたが 店内で買い物カゴを持たずに買っていた点を審査員に指摘され その結果 不合格となった。不合格となったにもかかわらず 本人にはその事態が推察できないようだった。

C男についても 千円までの金額について何とか扱うことはでき買い物もできていたが



忘れずに おつりを貰えたB男

家庭でおつりを親に返却していなかったと学級担任より報告があり その結果 不合格となった。

D子については 千円までの金額について何とか扱うことはでき 買い物も上手にできていたので合格だった。嬉しい表情が見られた。

不合格となった2名については 審査員より指摘された点を説明し納得させたりで再度買い物に挑戦させ 前回と同様の手順で発表した。今度は二人とも緊張して臨んでいた。結果は 合格であった。さすがにホッとした表情であった。

⑤ まとめ

家庭の協力を得て取り組んだ買い物については 当初の願いどおり一人で行く習慣ができてきたように思う。特にA男やD子は自信を得てきているようだ。B男については 千円と百円の価値の違いが認識できる買い物経験がもっと必要だと思われる。

今回の指導をふりかえってみると 習熟させたい知識や技術について十分な指導が行えなかったことが悔やまれる。日頃の教科学習や家庭学習と関連をもたせていければよかった。そのほか 本人が買いたいと思う物を買う経験を重視すればよかったと反省している。そのほうが 買い物の喜びを実感できるのではないだろうか。今後は 金銭の取り扱いに慣れさせるために 学校行事や実習（作業学習）などの販売の場面で できるだけ多くの生徒に実体験させていきたい。



品物選びに時間をかけるC子

（辻 俊）

レクリエーション学習の実践

本校でいうところの レクリエーション学習とは何か についてはすでに説明が加えられているので ここではこれまでにすすめてきた実践の概要について述べることにしたい。

(1) 年間計画

まずはレクリエーション学習についての年間計画であるが 各月ごとに主な題材を示すと次のとおりである。

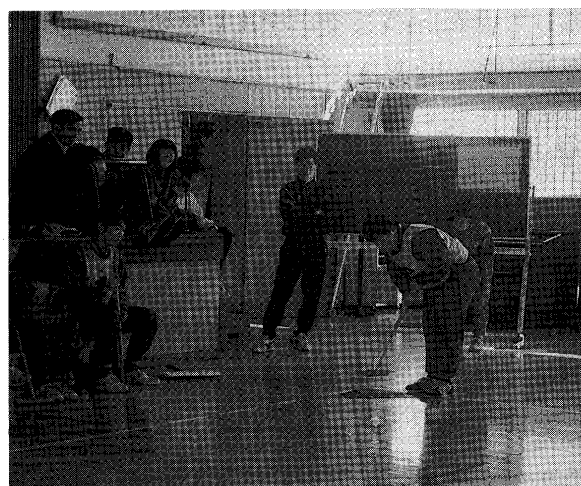
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
題	エアロビクス体操										
材	ゲーム 「だるまさんがころんだ」	ゲーム 「集合ゲーム」	ゲーム 「いすとりゲーム」	フォークダンス 「炭抗節」 「金沢キキヤク」	ゲーム 「仲間づくりゲーム」	ゲーム 「ジェンカゲーム」	ゲーム 「いすとりゲーム」	ウォークベースボール カルタ取り 「百人一首」			フォークダンス 「テンパリティガールズ」

(2) 内容・方法および活動の様子

上記の題材は これまで朝の会、体育、養護・訓練、特別活動の中で指導をおこなってきたものであるが 生徒が相互にかかわりあい楽しむという内容を多くもっていることからレクリエーション学習としても位置づけることにした。次に これらの題材について内容 方法および活動の様子についてふれておきたい。

① ウォークベースボール

このゲームは 富山県入善町で考案されたものである。本校ではゲートボールの用具を用いておこない リーグ戦も今年度で11回目を迎えている。1チームのメンバーは5、6名程度であり 5チーム編成して試合をすすめている。チーム名は生徒に考えさせているがプロ野球の球団名そのままのものが多く。チーム編成は 教師が監督になりキャプテンを選出した後はドラフト制の形式をとりいれている。冬期間ペナントレースをおこない優勝チームを表彰している。ルールは「“歩いて楽しむ野球” ウォークベースボール」(入善町教育委員会・入善町体育指導委員会)に



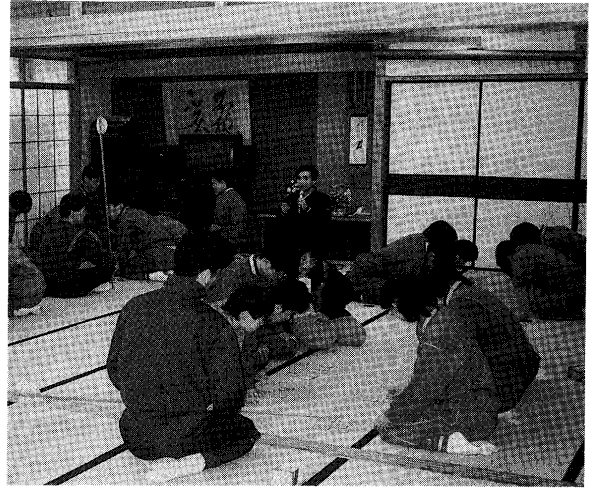
ねらいをさだめて「ヨイショ」

に基づいて決め 審判、記録、放送も生徒が行い自主的に運営にあたるよう配慮している。

熱烈なプロ野球ファンという生徒もいることからキャプテンには積極的な立候補がみられる。試合そのものの盛りあがりはもちろん 試合の前後に勝敗のことが日常会話の中でよくきかれ関心の高さを示している。また 自分が出場する試合のみならず他チームの試合観戦にも熱心で タンバリンなどを用いての応援も盛んに行い一戦一戦活気のある試合を展開している。

② カルタ取り（百人一首）

本校では生徒会主催の「カルタ大会」を昭和55年度より実施してきている。高等部では百人一首のカルタ取りをおこないブロック別に速さを競っていることからまとまった形で練習時間を確保し大会当日を迎えている。近年においては挑戦学習の共通課題で百人一首を覚える活動に取り組み生徒の意気込みも一層高まってきている。障害の重い生徒については大判の百人一首の札あわせの方法で行い、全生徒が参加できるよう配慮している。



カルタ取りの練習を重ねていくうちに上の句を詠むと同時に下の句の札をとる生徒も多数みられるようになってきている。また 挑戦学習での取り組みと相まって100首すべて覚えるという生徒もこれまでに数名でてきている。

よく聞いてから「ハイッ」

③ ゲーム

これまでに述べてきた ウォークベースボールや百人一首のカルタ取りもゲームの中にふくまれるが これらの二つは独自の取り組みを必要とすることから独立したものとして扱ってきた。ここでいうところのゲームでは「椅子とりゲーム」「仲間づくりゲーム」「集合ゲーム」などを中心に行い 伝承あそびの「だるまさんがころんだ」などもとりいれている。これらのゲームの中には全校集会で行われた内容をそのままとりいれたものもあるが 集団の規模や高等部という生活年齢ということも考慮して内容を発展させたり新しい内容を取りいれたりしている。ゲームに勝った場合は単なる称賛に終わらせず“ヒーローインタビュー”や胴あげなどを行い 雰囲気盛り上げるようにしている。

各チームが色別に並んだり ゼッケンをつけたりという活動は全校集会の中で経験していることから 見通しをもった行動がとれるようになってきている。また ゲームの内容を発展させたり 新しい内容にした場合でも 全校集会でゲームそのものに慣れていることから とまどいは少ないといえる。

④ エアロビクス体操

本校のエアロビクス体操は からだづくりをねらって養護・訓練の活動の一つとして平成3年から取り組んできているものである。リズムカルな曲にあわせてからだを動かす活動そのものを生徒がよろこび 生き生きとした表情がみられることからレクリエーション学習の中にも位置づけることにした。

エアロビクス体操の曲の組み合わせや動きは本校独自のものであり すでに生徒に定着してきている。生徒がからだを動かすことを楽しみながら自己開放をおこなう場となっている。

⑤ フォークダンス

フォークダンスも全校集会で取り入れられてきている活動の一つである。全校集会では子ども達になじみのある曲に簡単な動きをつけることが多いが 夏休み中の“いくゆう夏まつり”にむけて日本民謡のおどり「炭鉱節」もとりにいれている。この他 近年は地元の民謡「金沢ホーヤネ」にも取り組んできている。また 一般的なフォークダンスとしての「オクラホマミクサー」や「マイム・マイム」なども生徒の実態にあわせて指導している。

エアロビクス体操同様 生徒は曲にあわせて身体を動かすことが大好きであることから生き生きとした表情がみられ 男女ペアでの活動もごく自然にできるようになってきている。

(3) 実践をふりかえって

これまで レクリエーション学習の実践のあらましについて述べてきた。それぞれの内容は大きく異なるが 共通していえることは どの活動も集団があってこそ本当の楽しさが味わえるということである。さまざまなレクリエーション活動を通して生徒一人一人が仲間を意識し ともに活動することのすばらしさを感じとることはもちろん 互いに協力しあうとともに リーダーとしての力を発揮する場も与えられることから集団としてのたかまりもみられるようになってきている。また ゲーム、フォークダンス、百人一首のカルタ取りといった活動そのものがそのまま卒業後の余暇に生かされていることも特筆しておきたい。レクリエーションはレジャーとは区別され 教育的意味あいを多くもっているようであるが これまでの実践を通してこのことを実感としてうけとめている。

ただ このレクリエーション学習は いくつかの教科・領域の中からレクリエーション的な内容を取りだし 毎週水曜日一限目の高等部「朝の会」や「生活」をその時間に当て実践を試みている段階にあることから 教育課程の中での位置づけを考えた場合 さらに綿密な検討が必要とされるであろう。

(安 田 茂 章)

3 まとめ

挑戦学習がMTの時間として取り組まれて14年が経過する。卒業生の中には挑戦学習で学んだ百人一首や詩を時々口ずさんで楽しんでいたりと曲に合わせて優雅にダンスを踊る人もいて生活に豊かさを感じさせてくれる。挑戦学習で学んだことが余暇生活に根付いている例といえる。

このほか学校生活の様々な機会に各種ゲームやダンスなどレクリエーション学習が取り組まれてきている。

今年度 将来にいきづく余暇生活のあり方をまとめるにあたり日頃の学習活動をふりかえってみると これまでの「挑戦学習」や「レクリエーション学習」のほかに 新たに別の学習形態が必要ではないかと話し合った。

(1) 「ほんもの学習」を取り上げた理由

現在及び将来にわたって余暇生活を有意義に過ごすためにはどのような学習活動を設定したらよいのかということについて話し合った。

現在取り組んでいる「挑戦学習」や「レクリエーション学習」だけでよいのだろうか。不十分だとすればそれは何だろうかということになった。

「豊かな心と生活」という全体テーマについて考えると 一人で余暇を過ごす過ごし方もあるが できれば友達と余暇を楽しく過ごすほうが より豊かといえるのではないだろうか。また 生徒にとって多様な経験が数多くあるかどうかということも豊かな生活の前提条件になるのではないだろうかということであった。

仲の良い友達と連れ立ってどこかへ行ったり 何かをしたりすることは今からでも取り組まなければならない学習である。また 何事も経験がないということは 生徒にとっては できない・わからないといったことにつながり 生活空間が広がらず限定されたものになってしまうと思われる。それに比べれば 経験があることは わかる・できる・またやってみようといったことにつながり生活空間が広がりかつ深まっていくと思われる。

したがって 現在及び将来にわたって重要と思われるほんものの経験を仲間と関わりながら学習していくことが将来の豊かな生活につながると考え 学級ごとにそれぞれ指導計画を立て 実践してきた。

指導計画や題材選定にあたっては 在校生及び卒業生の余暇の過ごし方のアンケートを参考にした。また 指導にあたっては 生徒自らが能動的・主体的に活動できるよう配慮することにした。そして この学習を「ほんもの学習」と呼ぶことにした。

(2) 3つの学習活動の意義

研究を進めるにあたっては MT（マルチパーパスタイム）の時間に行う学習活動について 挑戦学習 ほんもの学習 レクリエーション学習の3種類の学習形態で実践しながらそれぞれのねらい・内容・方法・その意義について明らかにすべく研究を重ねてきた。以下に3種類の学習形態の意義について記しておきたい。

挑戦学習は 生徒一人一人が自分で選択した課題をやり遂げることにより成就感や充実感を味わい自信や意欲を養うことになる。学習したことが趣味や特技に結び付いている。

ほんもの学習は 自分のクラスの仲間達としたいことや行きたい所を選び それぞれの

立場や役割に合わせみんなで協力しあって大切な経験をやり遂げていくことにより興味・関心が広がり生徒相互の関わりあいを深め合うことになる。交遊の広がりに発展する。

レクリエーション学習は 学部全員でゲームやダンスを楽しむことにより 協調性や責任感が養われる。また開放感を味わうことになる。

このように ねらい・内容・方法は違っても 3つの学習形態は相互に関係をもって学校生活や家庭生活で機能している。生徒にとってはここで学んだことがまさに今の生活に生きて働く力となっているようである。

たとえば 挑戦学習で取り組んだA男のドラム演奏やB男のフラフープ回しが11月の表現会で多くの観客に披露された。それぞれに出来栄は良く 拍手喝采を受けることができた。2人とも自信と満足感にあふれていた。彼らの生活がまたひとつ広がったと思われた。また 挑戦学習は豊かな心を育てる学習の場ともなっている。たとえば自分では合格だと思っていたのに不合格と判定されて悔しく・腹立たしく思う生徒もいる。C子もそうした感情に包まれた時があったが コツコツ努力するA男の姿を通して自分を反省することができ 再び自分の課題に挑戦することができた。このように挑戦学習をとおして克己心や努力する心が養われていると思う。ほんもの学習でカラオケスタジオへ行ってきたD子が 商店街の主催するカラオケ大会に出場し入賞したと報告してきた。日頃声は小さく何事にも消極的と見なされていたD子だけに 信じられない程であった。どれくらい本人は嬉しかったことか。自信がついてきた様子がはっきりと伺えた。

このほかにも ほんもの学習で経験したことを 他のクラスの友達や家族と連れ立って経験してきたと報告してくる例も多くある。

このように MTの時間に経験したことが 着実に生徒の生活に根付いてきていると思われる。また 将来の生活に連なっていくものと確信している。

(3) 今後の課題

生徒たちの卒業後の生活を考える時 日々の労働の合間に自分なりの時間を有効に過ごせることは 今後ますます重要なこととして認識されると思われる。こうした視点にたつ時 在学中からそれぞれの趣味や余暇活動を見つける学習を積極的に進めていかなければならない。本年度から取り組んだほんもの学習についても同様である。学校だけでなく家庭でも取り組んでもらえるよう今後とも連携を取り合って進めていきたい。

ほんもの学習は事前学習をあまりせず とにかく実践を重視する学習である。それだけに何が起きるか分からない学習である。生徒同士が互いに助け合いながら進めなければならない学習でもある。こうした学習は指導者にとって事後指導を重視しなければならないといえよう。教室へ戻ってきてからの振り返りや確かめを行うことによって 次の学習に生かしていかなければならない。事後指導の取り組みが課題である。

このほか 学級ごとの学習集団が良いかどうか、障害の程度の重い生徒に対する配慮をどうするか、教育課程上の位置づけはどうかなど重要な課題が山積している。

本研究のうち ほんもの学習及びレクリエーション学習についてはまだ緒についたばかりであり不備な点が多くあると思われるので 今後とも実践を深めながら研究を進めていきたい。

(辻 俊)

資 料

これらは本章第二項「余暇生活の実態」で考察された二つのアンケート「余暇時間の過ごし方についてのアンケート」「挑戦学習・余暇についてのアンケート」の見本である。なお()内の数字はその結果の人数を表している。

余暇時間の過ごし方についてのアンケート

金大附属養護学校高等部

(当てはまると思う項目に○をつけ、内容はなるべく具体的に書いてください)

性別(男 女) 卒業学年(昭和・平成 年度)

(37) (27)

現在通っているのは(会社 作業所)

(32)

(18)

1. a 帰宅後は何をして過ごしていますか？(当てはまるものにはいくつも○をつけて下さい)

テレビを見る ゲームをする 散歩をする 風呂に入る 料理を作る

(43)

(7)

(7)

(21)

(6)

お酒を飲む その他(カラオケ 読書 音楽 マラソン ビデオ 手伝い 版画)

(7)

- b だれと一緒にいますか

一人 友達 家族の人(配偶者 親 兄弟 祖父母 他) その他()

(8)

(13)

(23)

(12)

(3)

(3)

2. a 休日は何をして過ごしていますか？

スーパー等買い物に行く あすなろ青年学級に参加する 兼友親子の集いに参加する

(18)

(12)

(22)

テレビを見る ゲームをする 本を読む CD等で音楽を聞く 料理を作る

(25)

(4)

(13)

(13)

(2)

カラオケに行く 散歩をする 家の手伝いをする お酒を飲む

(11)

(5)

(15)

(4)

その他(イベント 宗教団体 バスの旅)

- b だれと一緒に過ごしていますか

一人 友達 家族の人(配偶者 親 兄弟 祖父母 他) その他()

(9)

(2)

(23)

(10)

(4)

(1)

3. 長期休暇中(お盆、正月等)は何をして過ごしていますか？

旅行をする(一人で 家族と 友達と) スーパー等買い物に行く 遊びに行く

(14)

(3)

(5)

(1)

(20)

(19)

テレビを見る ゲームをする 本を読む CD等で音楽を聞く 料理を作る

(16)

(6)

(6)

(13)

(5)

カラオケに行く 散歩をする 家の手伝いをする

(8)

(6)

(14)

その他(お里へ 祭り 墓参り)

(3)

(1)

(3)

4. 趣味や習い事について記入してください。

趣味[カラオケ(8) 音楽(8) 野球観戦(3) 読書(3) 水泳(3) ワープロ(2) スポーツ(2)

寝ている(2) 時刻表 詩吟 カメラ 版画]

習い事を・している[内容 絵画(2) カラオケ 琴 ピアノ お茶]

・していない

5. おこづかいについて記入してください。

決まったおこづかいをもらっている (月 円程度)

500円(3) 800円(1) 1000円(7) 1500円(2) 2000円(3) 3000円(1)

4000円(4) 3000～5000円(1) 5000円(7) 6000円(2) 7000円(1)

9000円(1) 10000円(3) 11000円(1) 15000円(2) 30000円(4)

必要な時だけもらっている(13)

・おこづかいをどのように使っていますか？

食べ物や飲み物を買っている 本やCDを買っている カラオケや映画に行く

(4) (11) (5)

ゲームやパチンコ等をしている 欲しいものを買うため貯金している

(4) (12)

その他 (化粧 美容院 散髪 募金 甲子園 旅行 バス回数券)

6. 学校で学んだこと、遊んだことを家でもしていますか？ またそれはどんなことですか？

百人一首 縄跳び けん玉 キャッチボール ジグソーパズル 楽器演奏

(18) (7) (2) (21) (13) (4)

調理 洗濯 アイロンがけ 詩や俳句の暗唱 折り紙 果物の皮むき など

(5) (15) (5) (2) (6) (2)

その他、MTで挑戦したこと (駅の名前(2) 旅行の計画 英単語 プロ野球の名前

ピアノカ カラオケ マラソン)

その他 ()

7. これから余暇時間 (仕事が終わってから、休日など) にしてみたいことは何ですか？

(いくつでも書いて下さい。)

ごろね(5) カラオケ(3) 本(2) 旅行(3) 風呂 琴 テレビ 酒

ビデオ CD マラソン イベント ニュース ジグソーパズル 同窓会

バス旅行 ファーストフード 水泳

8. 困ったときにはだれに相談しますか？

配偶者 親 友達 学校の先生 青年学級の先生 施設の指導員・職員

(31) (2) (12) (3) (8)

その他 (会社の人 先輩)

挑戦学習・余暇についてのアンケート

回答数 28

学年 (ホーム) 性別 (男 女)

(どの項目についても複数の回答でも結構です)

1. 今まで挑戦した課題で、合格後もときどきしているものはありますか？

服のたたみ方(4) 百人一首(3) 折り紙(3) けん玉(3) プロ野球(3)

キャッチボール(2) フリスビー(2) ハンカチ・スカーフ結び ふとんしき

皮むき お茶 ドライバーの使い方 ジグソーパズル 計算器 時刻表

ジルバ 折り紙 やっていない(5)

2. どのような課題に挑戦させたいですか？

漢字(3) お金(3) ひもむすび(2) 調理(2) 針仕事(2)

箸の使い方(2) 時計(2) かず・計算(2) 日本地図(2)

トランプ(2) けん玉(2) 音楽(2) 駅名・鉄道(2)

コミュニケーション(2)

3. どのような場所に遊びに行ってほしいですか？(遊びにつれていきたいですか？)

またその際に何か問題がありますか。

公共の場所 行ったことのないところ いろいろな場所(3)

人と出会えるようなところ 友だちの家(2) サイクリング(3)

ボウリング(2) 登山 スケート 行事 ハイキング

なし 遊びに行くことはありません